

エンジニアパーク

Engineer Ring Park

長野県で幼少期を過ごし、神奈川県で育ちました。生物系の学科が好きだったので、水産系の大学を何となく選び、北海道に来たのが札幌オリンピックの年(昭和47年)でした。その後、大学で博士号を取得し、道立水産試験場の研究職員として、道内各地を異動しながら水産業に係わる調査研究に従事し、気がつけば40年が経過していました。

技術士の資格を得て2年になりますが、取得のきっかけは、職場の後輩からの勧めと、3年前に職場が地方独立行政法人化したことから、組織のアピールにも必要と考え、研究管理職として率先してチャレンジしてみようと思ったことです。また、技術(と技能)を持った多くのOBが定年退職後ただの老人になっている現状はもったいないと感じていたのも、職場を離れても何らかの社会貢献につながるきっかけに技術士資格が生かせればとの思いもありました。実際に資格を得てみると、贅沢な悩みかもしれませんが、公設試験研究機関に所属している私の分野にとってのメリットは未だ見だせておらず、単なる自己満足の段階に留まっています。現在札幌に居を移したことから、まず勉強を継続しようと、私もお世話になった技術士を目指す方達を支援するボランティアの勉強会の他、日本技術士会の催しにも参加してみようと考えています。今春定年を迎え、短時間再雇用研究職員を選択した自分自身の姿を、現役時代に感じたOBに対する客観的な視点で眺めつつ、今後の生き方を考えているところです。

吉田 英雄 (よしだ ひでお)

●水産部門(漁業及び増養殖)

勤務先

道総研 水産研究本部
(中央水産試験場)企画調整部



→次号は、小形 孝さん(水産部門)

私は1964年4月に小樽市で生まれ、そのまま小樽で育ちました。その後、職を求めて札幌に移民し現在に至ります。

さて、技術士との出会い。技術士というのがサイコーの資格である事は、若い頃から知っていました。しかし、今に思うと資格取得を目指したのは、サイコーの資格である事だけでは無かったと思います。

ある技術士さんと出会ったのは15年以上昔のことです。それは仕事上の出会いで、技術分野は私の専門分野でした。技術協議の中では、全てにおいて私の知識、経験が勝っていました。特に技術各論は一方向的に私が説明をしたと記憶しています。ところが、協議を進める中で、複数の技術各論の組み合わせ、現場固有の技術課題を抽出する際、そして技術的解釈に話題が拡がると、いつの間にか話の流れをリードするのは先方に。結果論ですが技術課題を体系的に理解する力が違っていたのでしょう。知識と技術の違い。今となっては当然の事ですが、その相違を、おぼろげながら感じたのがこの時だったと思います。私の中で技術士が「サイコーの資格」から「最高の資格」に変化した瞬間でもありました。

しかし、技術士資格に手が届く段階になった今でも、後輩技術者との協議において、自分自身の力量不足を感じる事は、少なからずあります。この時ばかりは、世間が言うとおり、「技術士資格はスタートライン」である事を痛感する瞬間でもあります。

今後も、未来の技術士さんと協議するチャンスは、沢山あるでしょう。私は「私が出会った技術士さん」と同様に、技術者を感動させる技術士を演じていけるよう努力を続けます。多分一生をかけて。

高橋 亮一 (たかはし りょういち)

●建設部門(鋼構造及びコンクリート・土質及び基礎)

勤務先

上山試錐工業株式会社

takahashi@ueyama-shisui.co.jp



→次号は、伊藤勝也さん(建設/総合技術監理)